

( 図上部のせりふ )

新 富 座  
浪 花 五 人 男

厂 金 文 七 中 村 福 助

梅の浪花に香も高き五人男のまつ先へ立や霞の朝

ぼらけ御ひるきといふ日の影に揃ふ大樹のその中へまだ

正月の花早くいわば荅の若衆形り芽ばえあがりも

お恵みに思わぬ此身に花が咲つらねも

初音の藪 鶯 ほう法華経より人並の

一ト木の数に加わるもほんの達師の天窓

数何れも様をお力に人の喧嘩をかいらぎ

鞞腰にさしたる尺八の恋慕流しに立引も

恋に和らぐ廓の春文の便りの厂金文七

極印千右衛門 尾上菊五郎

梅には我もゆかりある 幸ひ二月の式番目に出かけし柳の

芽出し時生れ附ての肝癩も素直に受し春の風

一年増に堪 忍を守るも積荷の鳥居数はつ午

祭りに額を下げ万年講に出た時から餓鬼大将に友

達も立し幟の正一人を化した野狐も

位か付て触頭丸い備へも飯櫃に成り

もつれた出入の済み濟せは油揚斗りは

食へねへがおれがお株のおしやべりにこんな

ものでも説つけて太鼓破りに仕ねへが自慢

急度受合極印千右衛門

雷庄九郎 市川団十郎

常は気早な極印が其堪忍をしる中に年げへもなく

出来ねへのは時さへ丁度三月に雛へ備へた桃の酒

いつペ多のんだら何事も癖に障るが持前に

花見に野暮な長刀其鞘当の口論

から落花狼籍遊興の花をちらせば

見て居らねず空さへもちる春の暮早手の

風にむらとむらだつ雲の向ふ見ず篠突く

雨より拳がふりぬけぬ先なら知らぬ事鳴出したらば

稲妻のきらめく劔の真中も恐れぬ雷庄九郎

安の平兵衛 市川左団次

つゞいて跡は四番目に月にていへば四月ゆへ卯の花新茶の  
新らしい一番つらねといふ所だが甘茶な口にむづかしく

耳のこゑたるいづれも様へくだらぬ事は釈迦に説法

元より無口は持前に余計な事をいわねへかわり

喧嘩と来たらつてペンから命をきりに時鳥の血を

吐までもやりとげて負るが嫌への初鰹たとへ此身を

きり刻まれさしみにされても中おちの骨は仲間で

ひろつてくれやうそこは平氣の安の平兵衛

布袋市右衛門 中村芝翫

扱どんじりに扣へたは第五番めに五月だが安におとつた無口

者長い事より小短紋切形でいわふなら意氣地を

立る門幟軒の菖蒲の勝負に氣も立

浪の染模様染て染らぬ酒の中いつも鐘馗の

餅好に向ふが鬼でも恐れは仕ねへと大きな

ことをいふものゝ腹に身のない泉月鯉四人を力の

臆病ものだが金太郎や桃太郎の子供がすぎで

節句には柏餅をここんで腹ツぶくれの布袋の市右衛門